



松尾慎一郎さん

(社会福祉法人悠紀会 につこり作業所 生活支援員)

香川県生まれ。幼少期より、障がいのある子どもさんたちとふれ合う機会が多く、大学でも福祉を学ばれ、平成八年になつこり作業所(①)に就職されます。利用者の方と一緒にパンを作ったり、施設外就労に出向いたりされる中、当時につこり作業所の日中活動として行なわれていたフリーダンスがきっかけとなり、糸賀一雄記念賞音楽祭に湖南ワークシヨップグループ(②)の一員として携わられるようになりました。音楽祭でダンスワークシヨップの発表が行なわれるようになった初回から現在までずっと、同ワークシヨップに関わっておられます。当初は、仕事の一部として参加されていた松尾さんですが、ふだん事業所では目にしない利用者の方の様々な表現や、ナビゲーター(③)が作り出す場の空気など様々な魅力を感じられ、現在は、「自分がやりたいからやる」というスタンスで、仕事の枠外でワークシヨップに参加されているそうです。

「いつの頃からか、踊り出していますわ」

山本 松尾さんは、ワークシヨップの現場ではどのような動きであったり、立場であったりされてるのですか。

松尾 最初は、普通に施設の職員として行っていました。だから、踊ったりとかはしてないんですよ。それが、いつの頃からか踊り出してますわ。

山本 初めは、けっこう戸惑いとかも。

松尾 はい。今もあるんですけどね、めっちゃめっちゃ。

山本 それは、どういう戸惑いなんですか。

松尾 今はどうしていいかわからんというのと、その当時は特に北村さん(④)が言うてはったんは、お手伝いしないでくださいというのと、その人はその人のペースでやらはるんで待っていてくださいという、その二つだけだったんです。だから、手を引っ張ったりとか、背中を押したりとか、そういうのは怒られたんですよ。じゃあどうしていいかわからんから、とりあえずずっと見ていたというのがあるんですけどね。

でも、ある時、女性のトイレ介助で、人手がいいひんな、

どうしようかなとなった時に、北村さんが、じゃあ私がついて感じでしたらと。ダンスの先生でありながらそんなことまでやってくれるんだ、自分の立場とか関係なくやってくれるんだというのがあって。だから、音楽祭に向けてのワークシヨップを支える人というか、スタッフという意味合いで来てくださっているのかなというところがあって。そんなんを見て、私も、にっこの職員の気持ちで行くけど、それよりも、湖南ワークシヨップを担う職員みたいな感じの心持ちで参加しますね、形はボランティアですけど。そのスタンスは変わらないですわ。

山本 じゃあ、松尾さんの中では、ああ、こんなことまでしてくれるのかというのは、けっこう……。

松尾 そうですね、大きいですね。ダンスの先生は踊り専門で、そっち方面は頑張るけど、それ以外の領域は知らないよ、という感じの人なんかと思っていたら、意外とそうじゃなかったんだという感じで。あと、音楽祭本番では、食事介助もお手伝いしてくださったりしたんで、あつ、そ

① にっこり作業所……社会福祉法人悠紀会が運営する事業所。

② 湖南ワークシヨップグループ……「ダンス・身体表現」の表現活動ワークシヨップを行なっているグループ。プロダンサーである北村成美氏がナビゲーターとなり、にっこり作業所や蛸の里の利用者や支援者がグループに参加しています。

③ ナビゲーター……県内の、表現活動の各ワークシヨップグループのナビゲーター。プロの音楽家やダンサーを迎えています。

④ 北村さん……北村成美氏。プロダンサー。湖南ワークシヨップグループのナビゲーター。

んなんやってくれるんだ、みたいなのがあって（笑）。だから、じゃあ、言うことを聞こうと言うたら変ですけど、そちらの言わはる領域も聞いとかんとかかんよな、みたいな感じに私自身もなって踊り出した。とりあえず一緒に踊ってくださいやから、一緒に踊っていただいいやん、みたいな感じで。でも、楽しく踊ってくださいねとか言われて、どうやったら楽しく踊れるんやろなとも思いながら（笑）。でも、やりだすと、彼ら、彼女らも生き生きとしたという感じで。ふだんでは見られないところがどんどん見られるようになってきて。ああ、こういうのもあるんやみたいな感じで。だから、今は一緒にダンスしているような感じになってます（笑）。

齋藤 ような感じ。

松尾 はい。自分としては、ダンスしているというふうには思っていない。何かわからんけど、とりあえず動いとこかみたいなレベルでやっています。

原動力になっているもの

山本 ワークショップへの参加は、松尾さんの中で何がその原動力になっている感じですか。

松尾 作業する風景しか知らないですよ、ここ（作業所）

にいる時は。もしくは、作業せずに何か好き勝手にやっている彼ら、彼女らしか知らないんですけど。でも、そうじゃない表情が見られるというのと、あとは、彼ら、彼女らにとっては好き勝手にやっているんですけど、それが作品として仕上がるという、その不思議さというか、驚きとか。そっちのほうの感動があったりとかですね。

最初のほうは、しげやん⑤が、あつ、○○ちゃん、これいいねとか、あれいいねとかいうふうに言うてはるのが、何がいいんやろな、何がいいんやろなと思ってきていたんですけど、ここ一、二年ほど、ああ、今の動きいいね、とか私にも思えるようなことが出てきて。そういうのが感じ取れるように、ちよつとずつですけどなってきたというか。それで、意外と面白いなという感じでやっていますね、今は。

山本 特に印象深かった利用者さんとの関わりとか、そんなことって？

松尾 今はもう違うとこへ行ったんですけど、Nさんという方が面白かったなという感じですね。ふだん、にっこりでは石のようになって動かへんねんけど、ワークショップの時だけノリノリになって、創作ダンスをするんですね。

山本 指示とか何もなくても。

松尾 何もなくて、はい。自分がやりたいことをやって、

自分が納得したら次の人にタッチをしてダンスをつないでいくというやり方をしげやんがされていた時に、ほかの人やったらどうしていいかわからんから一分とか二分ぐらいで終わるところが、彼は二〇分とかやるんやな（笑）。彼に回すと終わらへんねん（笑）。でも、面白いんですよ、表現が。だから、一緒にずっと見入りながらやってしまつて、うわっ、もうそんな時間経つたんかという感じでありましたね。

最近では、Kさんというて、よく私をひっぱたく女の子、ステージとかでも去年はようたたかかれたなという感じで。その方、ふだんは石になってね、なかなか動かはらへんねんけど、本番だけ動いて（笑）。

齋藤 見ている人がいる時って、変わりますよね。

松尾 そうそう。ステージの上だけ動くねん（笑）。予測してへん動きされるから、どきつとして、どうしてええかわからへん時があるんですよ、ステージ上で、こちらとしては。

齋藤 はあ、そんな動くのみたいな。

松尾 ええ。今、出ていくのみたいな感じで（笑）。今まで出ていかへんかったやんか、とか思いながら。面白いで

すね。

山本 そういう、ふだん見られない顔が見られるということも、一〇年続けてこられる原動力ということですね。

松尾 はい。あと、自分自身がいるんなら場面で勉強になるという感じですね。何せ向こう（ナビゲーター）はその世界では一流の人なんで、領域は違えど、ああ、すげえとか、やっぱり思いますね。

表現者？ 支援者？

松尾 今のポジションは、すごいあやふやなポジションでやっているんですけど。大げがやったら、もう二度とできないな、とか思いながら。

山本 やっぱり、そこでは職員という意識も持ちつつというところありますもんね。

松尾 そうですね、はい。続けていくためには絶対けがだけはさせられへんというのがあるんで。

山本 今のお話なんかを聞くと、松尾さんは踊ってもおられて、表現者でもあるけれども、でもどこかは職員だという意識が。

⑤しげやん……④にある北村成美氏のニックネーム。

松尾 個人的には、表現者じゃないんですよ。支援者なんですよ、やっぱり。だから、表現者と言われると、俺、違うんだけどな、とか思いながらね（笑）、ずっと思っていて。

山本 へえ、そうなんですかね。

松尾 だから、踊りながらでも、あの子はステージから落ちひんかなとか、後ろの袖口に誰も引っ込んでないやろな、一応出てきているよなとか、何かそんなのを気にしながら見ていたりとかですね。だから、舞台に集中していない自分がやっぱりありますわ、正直なところで言いますと。

山本 でも、それはやっぱりそうなりますよね。

松尾 いや、どうなんですかね。そこがよくわからないけど、私の中では（笑）。

山本 本当はどうできたらとかいうのは、あつたりされるんですか。

松尾 どうできたら。自分が目立たずに、彼らが頑張つて目立ってくれたらいいなというのだけ。

齋藤 思いつきり、何も気にせんと表現したろうみたいなことを思ったことはないですか。

松尾 いや、ないですね。ないですねという言い方は変ですけど。そうなんですよ、ないです。だから、表現はしているけど、やっぱり何かどつかで気にかけてますね。僕がやることによって、この人たちがあんまり表に出なかった

らどうしようとかね。私は動いていてええんやけど、基本的に主役は私じゃない、で、利用者さんが主役だというのが私の中にはあるもんですね。でも、どうしようかなと思ったりする時はありますよね、舞台では北村さんから、お手伝いはいけませんとか、そういうのを言われているんで。

山本 その人のペースでと。

松尾 そう。その人のやりたいペースであつたり、気持ちがあるからということ。でもな、とか思いながらね、何か。だから、私の中ではそれと日々葛藤中という感じですね。いかにもお手伝いしているように見えないうにしたらええんやなみたいな感じで、自分の中で納得しながらやったりとかしていましたね。

「表立って見せる介助をする必要はないんだ」

松尾 表に出てこない人があれば、空想でこう、ウリヤツと（輪っかを）投げて、あつ、気づいた、気づいた、よし、じゃあ引っ張るぞという感じでこう引っ張って、恐る恐る出てくるとかね。これなら許してくれるんかなみたいな感じで（笑）。

齋藤 手を引いたらあかんけど。

松尾 そうそう。手を引いたらあかんけど、これならオーケーかなと。そういうふうなのが勉強になりますね。だから、ふだんでもケアしていますよ、介助していますよという雰囲気を出さないようにしていたり。

山本 ワークシヨップだけやなくて、ふだんの仕事でも。

松尾 はい。だから、いろいろ緻密に考えてやるんですけど、ぱっと見は彼らが自主的に動いて作業をしているような感じのケアというか、介助というか、そんなのを考えるようになりましたね。表立って見せる介助をする必要はないんだ、みたいな感じで。

ただ、最近はどう〜んと思う時もあるんですけどね。大変そうに見えへんから、楽しってるやろ、と言われたりとかね(笑)。そういうわけでもないんだけどなとか思いながらね。最近では、その見せることを重視せなあかんのかなと思う時もあったりしますね。

山本 それは、どういう場面ですか。

松尾 見えない部分での介助というか、ケアというか。表立って見えないところの支援というのがどれだけ大変か知らんやろみたいな感じのところがあつて。だから、それやつたら見えるようにしているほうが、あつ、あそこはあんなに大変そうやと露骨にわかるほうがいいんかな、とかね。本当は、そういうふうなんが見えないほうが、彼らが彼ら

で、自分たちでやってるようにぱっと見、見えるほうがいいんでしょけど。

齋藤 大変さを伝える相手というのは誰になるんですか。

松尾 ご家族とか、スタッフとか。でも、自分で動けるように見えていたらええやんかとか思いながらね。ただ、要は見えない部分は伝わりにくいんやろなという感じで。だから、相当苦労してやっている人たちしか、見えない支援というのはたぶんわからへんのやろなみたいな感じで。ふだんから心がけてやっていないと、という感じですね。

山本 ただ、やっているだけじゃないねん、という。

松尾 はい。だから、私自身は見せつけるのはしたくないから見せつけへんみたいな感じでね。ただ、見せつけたほうがいいのかと思う時もあるけど、やっぱり嫌やし、せえへんとかね(笑)。

山本 そういふふうに変わってこられたのって、やっぱりそのワークシヨップでの……。

松尾 そうですね、北村さんの関わり方を見てという感じですね。

齋藤 それが日々の支援にも生きていくということですね。

松尾 そうですね、はい。ただ、それをじゃあどうやって実践すんねんとなると、またそれはそれで難しいんですけど。

目に見えないもの、言葉にはしにくいこと……

齋藤 作業所の中では、具体的にはどんなさりげない、気づかれない支援が繰り広げられてるのでしょうか。

松尾 具体的にと言われると、僕もわからないところがありながら。同じ作業を、他の職員がするとうまくいかないけど、私と一緒にやると何かいけて。何か特別な指示とか支援とか出しているとかわられるけど、いや、そんなつもりはないねんけど、みたいな感じで。

齋藤 間合いのとり方みたいな感じなんですかね。

松尾 そうかな。具体的にどうやねん、出しなさいと言われると、なかなか書面に落とせないんですけどね(笑)。

齋藤 言葉にはできない何か、合気道みたいな感じの。

松尾 合気道とはまた違うんですけど(笑)。まあ、でも、うん。

齋藤 面白いですね、その話。

松尾 だから、具体的にこういう手法があるとかというのでやっていないんですよね、ふだんから。こんな感じではないかなみたいな感じでやっているだけで。

山本 それはやっぱり、ワークシヨップを始める前と今とは、支援の仕方にも何か違いがあるような感じなんですか。

松尾 しっかり伝えてへんから伝わってないだけなんかな

とか思うように、最近はなつてきています。北村さんの表現は、例えば、今はやってはいけないとか、今はやっていいよとか言葉で伝えるんですが、ふだんはしなくても、ステージの本番になったら北村さんの思っていたとおりの動きになつているとかね。だから、技術に流されて、真剣に伝えることをしてへんのかなというのを、何か最近思うようになりました。だから、彼らはわからないんじゃないかと、伝え方が悪いだけかなという感じで。ど真剣に伝えてへんだけかなというのを思うようになりました。

学びが多いんです。だから微妙なポジションでも続けようと思うんだろうと思うんですけど。ワークシヨップを進めるにあたっての北村さんの進め方とか、間合いのとり方とか、全体を引きつけるのはこんなふうな感じにするのかとか。言葉で説明せえと言われたら、言葉にできないんですけど。場の作り方と言うたらええんですかね。それを、あつ、うまいなとか、すごいなと思う時がけっこうあるんです。勉強になりますね。

「金銭にかえられない、

プラスになる面という感じですかね」

齋藤 何か世継ぎへのメッセージみたいな、例えば何かあ

りますか。

松尾 世継ぎですか、何があるやろう。どうあるべきかと言われてもなあ。

齋藤 湖南ワークショップが今後、どうあるべきか。

松尾 ずっと続いてくれたら、財源が安定してくれたらそんでいいよなという。ただ、今が一番、逆に言うといいのかなと思ったりする時もあります。財源が安定すると、例えば介護は介護の人間がいるし、ダンスはダンスの人間がいるから、逆にそういうつながりがなくなっていくんかなとか思ったりもするんです。今は人手がないし、お金がないし、回らないから、みんなやってねという感じできているんですけど。あんまりそればかり表に出すのもいけないんですけど。今後どうするかって、あんまり考えたことがなかったんですけどね。

山本 でも、やっぱり続いているといいなというのは、利用者さんにとって、すごくいい取り組みだという確信を持っておられるという。

松尾 それはありますね。で、支援者としても学びがあるという。

齋藤 松尾さんみたいな人を増やすには、どうしたらいいんでしょうね。その場に行くという感じですか。

松尾 その場に行くにはけっこう勇気が要ると思います

わ。あと、なかなか……難しいかな、私はとりあえず自分の時間、仕事とそれ以外の時間を使ってでも、何か学びたいものがあつたらそっちに行くというのがあつたんですけれど。今は、仕事は仕事、それ以外の時間は自分のやりたいことをやるという風潮になってるから。それはそれでいいんやろうけど……。私の中では、得るものがあるから、有給届出してでも行くというのがあつたんですけどね。障害者の施設って、基本的にそんなところで成り立っているのかなと思いがち。

齋藤 そんなところ、というのは。

松尾 金銭にかえられない、プラスになる面という感じですかね。それが確実に自分にとってプラスになるのか、いつの間にかプラスになっていたというふうになるのかは別にして。お金にかえられない何かを感じ取れるか、感じ取れへんかかなとか、勝手に想像しますけど。そんなふうにしか言えなくて、ごめんなさい。

齋藤 いえいえ、いただきました。

山本 今日は、お忙しい中ありがとうございました。